

東海道五十三次を往く

第34回

海上七里を控えた41番目の宿場、宮宿をミスモ編集部が巡りました。



熱田神宮

樹齢千年以上というクスノキの巨木も残るうっそうとした広大な敷地の中に深閑と鎮まる熱田神宮は、三種の神器の一つ草薙神剣を祀る。全国から年間700万人程の参拝があり、伊勢の神宮に次ぐ大宮として知られている。



七里の渡し 東海道で唯一の海上路「七里の渡し」の渡し場跡。旅人はここから船に乗り、伊勢湾を約4時間かけて渡って次の桑名宿に向かった。

食

宮きしめん

熱田神宮の境内にある「宮きしめん」は大正12年創業の老舗。平打ちうどんに鰹の削り節がたっぷりのっている。「宮」の文字入りかまぼこも楽しい。

宮きしめん 神宮店

愛知県名古屋市熱田区神宮 1-1-1
熱田神宮境内 くさなぎ広場
☎ 052-682-6340



みや宿

熱田神宮の門前町と東海道で唯一の海上路

宮宿と言われても場所が思い浮かばない人もいるかもしれないが、ほぼ今の名古屋である。熱田神宮の門前町として栄え、五十三次の中でも最大級の賑わいを誇った宿場だ。広重の「宮「熱田神事」」の絵はこの熱田神宮の神事の様子が描かれている。しかし、宮宿は熱田神宮以外、名古屋の都市開発の波に飲まれて当時の宿場の面影はほとんど残っていない。そんな宮宿だが、宮宿から次の桑名宿までの航路「七里の渡し」の渡し場跡には、常夜灯や鐘楼が復元され「宮の渡し公園」となって往時の面影を偲ばせている。また、渡し場跡の近くには脇本陣跡の丹羽家住宅なども残っている。このあたりは都会の喧騒からも離れており、かつての渡船の発着場に佇んで、水面を眺めていると当時の船旅に思いを馳せることができる。

往時の面影を偲ばせる、かつては料亭だった熱田荘

※現在はグループホームあつた荘として営業



東海道と佐屋街道の分岐点にある道程



おみやげ

きよめ餅

江戸中期に熱田神宮西門近くにあった「清め茶屋」にちなみ、きよめ餅総本家創始者が売り出したことが始まり。以来、「熱田詣りに、きよめ餅」と親しまれている。こし餡をやわらかい羽二重餅でくるんだ銘菓。

きよめ餅総本家

愛知県名古屋市熱田区神宮 3-7-21
☎ 052-681-6161

